

令和6年度第2回京丹後市新経済戦略推進会議 会議録

1 開催日時

令和7年2月18日（火）13:30～15:30

2 開催場所

京丹後市役所峰山庁舎 201 会議室

3 出席者等

■出席者 行待佳平会長、久米一郎副会長、山崎俊巳委員、松田智生委員、小野寺由美子委員、河野修己委員、浅井智美委員、田茂井勇人委員、尾崎至弘委員、福岡崇委員、田中智子委員、宮腰英明委員、森下裕之委員、足立眸委員、八隅孝治委員、中山泰（京丹後市長）、棕平智博（オブザーバー）、白江喜之（オブザーバー）、笠原和史（オブザーバー）

■欠席者 錦織隆委員、奥野美奈子委員、福島和彦委員

■事務局出席者

京丹後市

商工観光部

高橋尚義

商工観光部商工振興課 金木美由紀、田中勝茂、松本隆明

4 内容

（1）あいさつ

（2）京丹後市新経済戦略の方向性について

（3）その他

5 公開又は非公開の別

公開

6 傍聴者の人数

0人

7 要旨

（1）あいさつ

（市長あいさつ）

○中山市長 皆さんこんにちは。第1回に引き続き今日もお集まりをいただき誠にありがとうございます。今国の方では、予算編成真ただ中ということで

ありますけども、我々も注目しながら、同時に京丹後にあっても、予算編成作業の真ただ中という状況です。今年は諸物価高騰とともに、また人件費も人事院勧告という仕組みの中で、地方も人件費を上げていくというのがもう各地で行われていて、我々の方もそういったことを踏まえて、予算編成もさせていただいている最中です。いろんな諸事業をする中で経常経費の上昇等を見込みながら調整しているということなんですけど、いずれにしても、希望や安心や、また活力をいろんな分野で多彩に創造をしていただけるような環境づくり、そして、将来世代にしっかりと、そういった希望安心活力というものを引き継いでいけるような、そういうような環境ですね、ぜひ作っていききたいということで、今努力しているという最中です。このことが、今、人口対策とつなげて、求められる地方創生にも、大切になってくるということでございます。地方創生ということだと、全国各地域、まず言われるのは子育ての環境をどうするのかとかですね、ここがもう、広く各地で言われています。生活環境とか子育て環境、これ我々も頑張るんですけど、なぜ子育て環境が、特に重点を入れてやるかということの、いくつかの理由の1つは、若い世代に子育てしながら住んでいただく上でのよりよい環境を作っていくんだということ。そのことが、人口対策、定住対策にも繋がっていくんだというそういう問題意識で、各地でやられているわけなんですけども、我々も同じなんですけど、けども、我々のところは、子育て対策だけでは、人口対策にはなりにくい面が他地域と比べてありますのは、他の都市部周辺の自治体は、働く環境は、大都市に行けばあるんですね。なので、自分のところに働く環境がなくても、公共交通を使って大都市で働くということができるので、自分とここに働く環境がなくても、住める環境、より良い子育てしやすい環境で住める環境さえあれば、それが人口対策に繋がり、定住対策にも繋がりやすいということなんですけども、我々の地域は、子育ての環境だけではだめなんですね。働く環境、いかに魅力を持って、働きたいと思えるような環境等を作っていくかということが、そろわないと、定住対策にはならないということがあるので、かねてより他地域以上に、この経済の問題、雇用の問題。若い世代の皆さんが、求めて来ていただけるような仕事で、来ていただけるような環境を作っていくかということが、我々のこの、海山里のすばらしい自然環境とも調和させながら、新しい魅力として都市部にはない環境の中で仕事をできるような環境を作っていくかっていうことが大切だと。ということでこの経済の問題力を他地域以上に上げてきたということはあるんじゃないかなというふうに思っております。その意味で、前回も新たに我々のまちをめぐる環境として、道路が大動脈として通ってくるような環境だったりとか、或いはD Xでもって距離のハンデがなくなるようなことだったりとか、或いは海山里の環境生かせる環境だったりとか、或いは、社長さん、事業所長さんが、日本の中でも、一番多いまちの一つですよってというようなことをプラスにとらえながら、どういうことができるのかとか、いろんな、働く環境としての、これからの時代に向かう、そんな、これからの時代の豊かさに向かうようなそんなことも背景に置いてくださりながら、いろんな議論をしていただいたらというふうに思っております。

ます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(会長あいさつ)

- 会長 本日は大変、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。
本日は第2回の新経済戦略推進会議ということで第1回に続きまして、皆さんにご意見をちょうだいしながら進めて参りたいというふうに思っております。
我々経済団体としては、やはりこの地域で働き、働く場所があるということが、最終的に大事な事なのかなというふうに思っておりますし、人口減少が大変、問題になってる中で、人口減少に対する皆さんのご意見を賜りながら、どうやって解決していくかっていう問題になるかなというふうに思っております。
それでは本日はお忙しい中で、この人数ですので、ご協力をいただきながら進めて参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

(2) 京丹後市新経済戦略の方向性について

- ・事務局から資料1及び資料2に基づき、京丹後市新経済戦略会議についての説明。
- ・足立委員から、別添資料に基づき、市内の事業所等に関する情報提供。

(質疑応答及び意見)

- 委員 私の方から織物の話を中心にさせていただきたいと思います。現状といたしまして京丹後の中で事業所数が多いとかいろいろとあるわけですが、基本的には、丹後のいわゆる機屋の個人事業主の方々が、昔から多かったというところだと思います。ただ年々減少傾向にあり、高齢化が進んでいますので、残念ながらそこには後継ぎ、事業を継承される方々がおられないという現状の中で、限りなく減っていつてしまうということです。

我々業界としみしても歯止めをかける施策がなくて、非常に厳しい環境ということと、我々取り巻く業界全体の環境も、やはり着物、和装を中心としている業界、産業でもありますので、着物を着られないという構造的な不況から始まって、今に始まったことではないので、これもずっと右肩下がりが続いているというところでもあります。ただ和装は日本の文化の象徴と言ってもいいぐらいなので、なくなるものではないのかなあとは思っています。着物がなくなるということは日本の文化自体がなくなるに等しいと思いますので、何とかこれを次の世代につなげていかないといけないと、取り組んでいるところです。

その中で、日本全体を見た中では、和装の産地におきましては丹後は圧倒的に大きな産地ですし、シルクの需要でいきますと、4割以上が丹後で消費されているということですし、他の産地から比べると、同じような白生地産地でいきますと、滋賀県の長浜、新潟の五泉、福井の方にも産地があるんですけど、その辺の

産地からいくと 9 割ぐらひは丹後で織っているという環境の中で、丹後がその中心的な役割を占めているというところでもあります。ですので、それを引き継いでいく中で、丹後だけではなく、横の、各産地との連携を深めていかないといけないと思っています。もういよいよ日本全体が 1 つの産地というようなイメージでとらえていかないといけないと思っています。あと組合といたしましても、白生地は 9 割以上が丹後で、あと染の着物を支えていて、西陣の 8 割、9 割が丹後で製造しているということで、西陣を製造拠点として支えているというところでもあります。そんな中で、事業者の大半が西陣の帯をおられている個人事業者の方々が一歩一歩ですので、そこが先ほど言いましたように残念ながら後継者がいない環境の中で、なくなってしまうというのが目の前に来ているというところなので、そういう意味では西陣とも連携を深めながら、今後どうするかということを考えていかないと、西陣の方も生産拠点としての丹後がなくなるってということで、相当危機感を持ってところでもあると思います。そういう中でいくと、今までのような個人事業主というのは非常に難しいと思うので、やはり内製化という工場形態の工場を作っていくと難しいのではないかなというふうに考えております。組合の振興プランの中でも内製化を進めていこうということですけれども西陣織物工業組合さんとも話をしつつ、どのような対策を練っていくかということで動き出しているというところでもあります。今までの個人事業主の方々も、決して悪いわけではなくて、結局収入が余りにも少なくなってきたというですね。全盛の頃はご夫婦でやられて、月に 100 万円以上の収入を得たりしていて、相当な収入があったわけで、それがもう今ではもう時給に換算すると 200 円、300 円かなという環境で、それは誰も後を継ごうという気にはなりませんよね。そこを何とかしないといけないということと、ただ今ならまだ家に織機があり教えていただけるお父さんお母さんがおられて、家でできる仕事ということで、子育てをしながらでもできる仕事ということで、自分のペースでできる仕事でもありますので、そういう意味では、そこがうまいこと、収入に繋がるようなことも施策でできれば、決して悪い仕事ではないので、つなげられないかなあとも思っているところでもございます。

あとは新産業というところで期待するところは、京丹後市が取り組んでいる新しい養蚕も含めてというところで、我々が使う糸は海外の糸に完全にシフトしていて、値段ばかりではなくて、品質が国産糸より良くなったという理由もあって、そういう意味では例えば今の着物とはまた別に、機械金属の方でも宇宙って話をされていますけれども、我々の織物にしても絹の特性を生かしたものづくりっていうのが重要なことだと思っていて、随分昔からいろいろとシルクの可能性というところで、例えば UV であったりだとかいろんな試験をさしてもらったりとかしていて、野蚕という自然にいるような蚕だと、いう UV A から C まですべて吸収するとかですね、そんなような事例もあったりしますので、品種改良的なところで、例えば、特殊な性能を持った繭がつくれるようなことができていきますと、宇宙の、例えばインナーとかに使えるような素材が、例えば撚糸の技術などと合わせていってやっていくと、面白い素材ができていくんじゃないかな

ないかなと思っています。多孔質な繊維なので、においがつかないといったこともありますので、例えば宇宙に出ていってお風呂に入れない環境の中で、下着なんかではすごく向いているような素材だと思いますし、軽くて暖かいという機能的なところもあるので、そういった新しいものづくりにも連携していけたらなと思っています。

○委員 最初に思ったのは、京丹後市のために今何ができるかな。今ある企業をずっと続けること。雇用を維持することで、儲けて京丹後市税金を納めることが思いついたんですけども、この雇用の面で、全国的に、人手不足となっていて、実は私と特定技能の外国人を、2年前に2人、去年2人、今年の4月から4人、計8人を雇用することになっているんですけども、なぜこれふやしていているかというのと、やっぱり人が来ない。募集しても集まらないというのがありまして、私どもは鉄工所ですけども、鍛造業といいまして、なかなか人が集まりにくい業種です。

特定技能外国人の方は、日本で同業他社に3年勤めて、経験者を、日本語も普通にしゃべれる、そういう経験者を、ちょっと給料は高いですけども雇って、うちに来てもすぐコミュニケーションが取れるし、すぐ作業もできるし、一般作業だったら十分クリアできるなということで、今いる日本の方も非常に仕事がやりやすくなって、いい方向にいらいますので、どんどんこれも増やしていきたいと。企業を成長させて、続けていきたいというふうに思います。

○委員 冒頭市長が京丹後市の対策を考えていくにあたって、市内で働く環境をどう作っていくのかということが必要とおっしゃったときに、そうだなと思いつつ、逆に、人手不足もあるんですね。つまり働く場所自体はきっとあるんだと思うんですね。そこに考え方としてギャップがあるような気がしています。事業所としては、たくさんある。且つ社長さんが多いということで、そういうポテンシャルも十分にあると思うんです。じゃあなぜ今こういう状況になっているのかと考えると、我々の方で人材育成事業として若い社員さんの研修をする中で、春に入られた方が秋冬頃にはがばっと辞められるというような実態を今年度体験しまして、それを背景に企業さんに行くときに、採用された方はどうですかといういろいろ聞くんです。工場など、働く環境としては非常にハードな環境の会社に、人材の関係でお聞きしたんですけども、逆にそういうところに入られた方が、いや機嫌よくやっていますよと、給料的に別に有利なわけでもなく、働く環境としても非常に厳しいのにそこはちゃんと残っている。逆に、ここいい会社やなあって思っているところでも、やめちゃいましたというところも多いんですね。結局、自分はこんなことをしたいんだということが、ある程度明確なところというのは、人にとっての魅力になるんだらうなというふうに感じているところなんです。ですので、たくさんある事業者さんの中に、中心となる考え方、言語化できるものというのが、共感できる考え方と言ってもいいかもしれないですけども、できてくるというのがすごく大事なんだらうと思います。

その中で宇宙産業への進出のようなものは、1つはわかりやすい柱としてあり得るのかなと思います。それにプラスして、ローカルベンチャーのご提案いただいたんですけれども、そういうことを起こすための余白、環境というのは、京丹後市、割と恵まれているようには思います。この宇宙産業とローカルベンチャーがどう絡むのかということなんですけれども、新しくできた産業もうまくそこに絡んでいけたらいいなと思います。

○委員 丹後の特徴はものづくりだと思うんです。織物であったり、機械金属もものづくり。ただ、今の教育のあり方がおそろかにされている部分があって、昨日テレビで見た住みやすい関西の住みたい町の1位が西宮市だったんですが、それはなぜなんだろうなとも思っていたら、教育の面でした。小さい頃から少人数で英語を話せるような、そこなのかと。便利さが重要視されますが、それだけでいいのかと疑問に思っている人も多いのではないかと思います。

経済の変化を受け、子どもたちもお金や社会制度について考える機会が増えていて、こうした子どもたちに対して、単なる利便性だけではなく、地域のつながりや文化の価値を伝えていくことが重要だと思います。事業所が多いというのは、今までの丹後ちりめんやいろんな産業の中で、つながりの中で生まれてきたものだと思うんです。地元の商店をもっともっと活用すべきだし、そういうことに一生懸命取り組んでおられるところもあります。狛猫祭りというイベントが今年で10回目になるんですが、市民が一生懸命にやって熱意を持ってやるのが大事だし、それを伝えていく、それが伝播していくように自分たちで盛り上げていきたいなと思っています。

基幹産業である丹後ちりめんも今、ターニングポイントで、やっぱりチャレンジして変化しないと。宇宙産業はもうすごく魅力的だし、またタンゴオープンセンターという構想もありますね。そこにはものづくりであったり、畑であったり、桑畑であったり、これができることは、私たち丹後にとっての誇りなんです。足跡なんです。ここを起点として、大きく舵取りをやってみないと。コアなものを、どこを目指すのか本当のコアの部分、京丹後市としてどういうふうな、京丹後市の良さがわかる、京丹後市のよさをちゃんと確立して、そして伝えるというところはものすごく大事なことで、それを伝える努力をしないといけないのかなって思います。

○委員 商業部門、特に小規模小売業部門では、なかなか雇用というのは、たくさんは生み出せないですが、そういった中においても、働く時間を短くできると働きたいという人はたくさんいて、8時間は無理でも4時間ならいける、また、朝早かったら行ける、夕方なら行けるなど、柔軟な働き方の仕組みがあれば、子育て中のお母さんでもやっていけると思うんです。

ハローワークは規模が大きく、小回りが利きにくいので、商工会や市役所が主体となり、細かくマッチングできる仕組みがあれば、雇用が生まれるのではないかと

思います。また、ローカルベンチャーだとかソーシャルベンチャーの話も、今日聞かせていただいて、この京丹後市の中にそういう方々、新しい人が地域に入ってくるとはいいんですけども、地域の中でもっと繋がれば、面白くなっていくことが、どこかで途切れているんじゃないかなというような気もしています。この間、峰山の商業者工業者を集めて、横の繋がりを作ろうという集まりを行ったんですけど、それに参加していただいた 98%の人がまたやって欲しい、もっと横の繋がりを持って化学変化を起こして、新しい商品や価値観を生み出せたらいいなと思っていました。

最終的には人間がやることなので、人の気持ちが上がってこないと、なかなか難しいと思うので、そういうその人の機運を上げていくような。個々にイベントをバラバラにやるんじゃなくて、大きい花火をどんと上げて、その注目度を上げていくというのも大切なあとと思っています。

○委員 私は移住してきて、起業した立場でお話をさせていただくと、農家を支援するような会社をしているんですが、移住関係と農業関係 2 点でお話しさせていただきます。

移住関係でいうと、京丹後って結構魅力がたくさんある地域と思うんです。ちゃんと情報を伝えていけば、もっと移住してくる人が増えてくると思っていて、伝え方というのが、最近よく関係人口という言葉で言われますけど、京丹後を知って、次に旅行とかにたまに行ったという段階になって、何か応援してあげようという段階になって、移住という段階を踏んで、そのステージがあるんですけど、それぞれのステージに対する何かこう、市からのバックアップとか、そういう体制ができればもっと多くの人が、どんどん関わり方を深めていってもらえるんじゃないかと思いました。

農業に関する点で言うと、今後農業分野もかなりの人手が不足していくと思っていて、10 年経つとかなり辞められていく方が多くなると思うんです。その中で、新規就農はハードルが高くて、特にフルーツ関係でいうと収穫できるまでに 5 年ぐらいかかるので、その間をどうするかとか、ハードルが高いんです。ですので、後を継いでおられる若手の方が規模を広げていって、その中で雇用を増やしていくといった形が多くなってくるとは思うんですけど、そういうことに対する支援もできてくれば、より農地を守りながら、人も増やしていけるんじゃないかなっていうふうに思います。

○委員 今日のお話を聞いていて、移住者をもっと増やしたいとか、事業者数とか売り上げを上げたいというのはあるかと思うんですけど、あるものをどれだけ生かしていくのかという点が大事だと思いました。京丹後はすごく魅力的な町で、おられる方もすごいすてきな方が多いですが、今後、すごく頑張ったとしても人口減少と高齢化、あと事業者数が今は多いんですけど、少なくなっていくというのは、なかなか食い止められないと思うんです。でも今いるメンバー、高齢者の方も多いんですけどもすごく元気なんです。僕ら以上に、技術と経験

を持たれている方が京丹後には多いので、そういう方々に僕らは支えてもらって、もっと加速していくということが大事かなと思っています。

あとは、ここの魅力は顔が見えるつき合いが結構あるということです。なので、スーパーとかネットで物が買えるんですけど、そこちょっと高くなるかもしれないけど、不便だけど地元の店で買うこと、利用することのメリットがもっと知れ渡ったらいいなっていうのと、その仕組みを行政の方々と一緒に作っていく必要があると思います。

また、従業員の減少とか織物業の厳しい状況とか、働く場、雇用の確保、創出、この辺が課題にあるということですけど、これもあるものをどれだけ有効活用するかという観点で見ますと、すごいいい会社、いい企業がたくさんあるのにまだまだ移住前の人からすると見えてないというのがあります。ローカルベンチャーが結構きらきら見えがちなんですけど、既存の企業でこういう働き方ができるよ、例えば副業ができると、なので自分のしたいことを移住した後、就職しながら、自分の仕事を副業としてするとか、例えば、お子さんを産んだ女性の方であればフレキシブルな働き方ができるよとか、既存の事業でできることはまだまだあると思います。

また、高付加価値という部分ですけどもこれも同じです。地域であるものを使っていることにもっと価値を、価値があるってことをPRしたほうがいいと思っています。他で買う方が安いかもしれないけど地域で買うことっていうのが、環境にとっても地域にとっても、未来にとってもいいということをもっとPRし、行政もそれを支援する、サーキュラーエコノミーであったり、エシカルというのをちゃんと地域のブランドとして発信するということで、僕の会社であれば、今後海ごみとかプラスチックのごみをエネルギーに変換したあと地域の公共交通機関であったりとか、事業者にボイラーとか電気で使ってもらうことを構想しているんですけど、そういうのをどんどんやっていきたいという話をしています。

○委員 人材不足の話もありましたが、私自身4年間、広告会社で人事をしまして採用や研修、いろいろしてきたんですがどこも人材不足です。今あるすてきな会社がたくさんあるので、どうしたらもっと、魅力的な会社というふうに伝えられるのかとか、あと同じような業態でも、いいと思う会社となんか合わない、なんかハードだねって思う会社ってあると思うんですけど、そういう働く会社、働きやすい環境の整備みたいなところでも、みんなで一緒に考えてやれる部分があるんじゃないかと思いました。

お金よりも働きがいとか、その職場の人間関係がいいみたいなのが、結構働くモチベーションになるみたいで、そこを既存の企業の中でどう整備していくかということも大事な観点かなと思いました。

あとさっきおっしゃったようなローカルベンチャーみたいな、目立っている人たちと地域の方々の繋がりみたいところで、本当に課題だなと思っています。100人会議などでの動きもどんどん加速させていく必要がありますし、お互

い歩み寄らなきゃいけないんだろうなと思っています。ぜひ先輩の方々にも、私たちがいるような場所にも来て欲しいですし、私たちもどんどんそういうところに出ていかないといけないなと思います。

資料2の最後のページを拝見して思ったんですが、この理念ビジョンが、すごい難しいなと思ひまして、私ぐらいの世代の人が見たときに、難しいから入りづらいなみたいな気持ちになるんじゃないかなと思ひていまして、もし今後こうで移住者をふやすとか、若手の人材確保というのであれば、こういうコアとなる考え方、もう少しシンプルな平易なわかりやすい言葉にしていっての方がいいんじゃないかと個人的には思っております。

行政ですべてやるのではなくて行政にしかできないことを行政でやって、民間でもできるところはどんどん一緒に盛り上げていく必要があると思ひているので、行政としてどこを選択するのかというのを考えていく必要があるなと思ひています。

○委員 活発な意見交換で、モチベーションが非常に高いのが素晴らしいなと思ひました。私自身は今大学院でまさに、地域課題解決型の授業をやっている学生たちにチームを組んでいただいて、リアルな町の課題、今年は千葉県香取市と伊豆の松崎町を取り上げて、学生たちが集まっているいろんな議論をしながら、行政の方とお話をした上で作り上げる事業やっています。

大事だなと思うのは、その地域に住んでいる人たちから見る地域の課題感と、外側の人たちから見る課題感、見え方は場合によっては全く違って見えたりするわけですね。地域の方から見ると当たり前のことが外の人たちから見るとすごく魅力。美しい自然があっても、その情報発信が十分なされてないので、よくわからないのもっと教えてくださいとならざるを得ないんですよね。そこはその思いの次元がずれていることがあるので。また、地域の中で幸せを考えるのに、お金だけではないというのは、それはそうなんです、やっぱり地域で若い人たちが働こうと思ったときに、仕事があって収入があって生活ができる、最低限できるというところの基盤がまず欲しいわけですね。西栗倉村も、私はもう10年以上ずっと見ているんです。毎年、市役所の人たちと意見交換したりさせていただいているんですが、毎年進化しています。1つの軸は、100年の森で、森林資源をどう使うか。ですから、京丹後市がこれまで先代から培ってきたもので、耕作放棄地など今、どちらかと資産としては不良化してしまっているものをどう扱うか、棚卸をきちっとして、サーキュラーエコノミーの考え方でいけば、そういったものを今日的な価値と言ったときに、地域の中にいる人たちが見える世界観と、地域の外側から見たときの世界観と、そこをうまくマージさせて、答えを出していくっていうプロセスが必要だと思ひます。

大事なことは、地域の課題を、社会経済、経済というワードを入れて、経済を回すという考え方が必要だと思ひます。

確かにネットで何でも買ってしまうんですけど、地域のものを買いましょう。まさに、フランスで取り組まれている地産地消という、マルシェという考え方は、

まず地域のものをマルシェに集めて集って語り合っという。いわゆる生産者と消費者と行政が三位一体となった形で進められているわけですね。多分それはどこでも取り組めるんですけど、日本が高度成長期を通じながら、大量生産大量消費の経済的な価値観に馴染みすぎてしまっていると。

ただし世界は真逆をもう行っていますからね。だからそこは切り替えるいいチャンスなので、今回皆さんの議論の中で、自分たちがどうするっていうのはもう横串が入れられているというのはすごく素晴らしい。あとは外の人たちともどうやって向き合うか。フランスの場合は、地域の中で余剰物を外に売って儲けて豊かになろうと、中の経済は中で十分回していきましようという基本的な考え方があった上で、外で稼ごうっていうんじゃないくて、余剰物を外に移出することによって潤おうという発想なので、まず自分たちがいつも主語で主役なんです。そういう考え方を皆さん持ってらっしゃるのは素晴らしいと思いましたので、必要があれば、その他の地域の事例というのは参考にさせていただいた上で、自分たちの中でどうしていったらいいかということを、最終的に答えを出していただきたいなと。

それと市役所、行政は確かに後押しだったり、場合によっては引っ張り上げるっていう仕事も必要かなと思います。一昨日までドバイ行っていたんですけど、この国はいろんな国の企業の人たちが来て、文化の交流だけでなく経済の交流、売り込みをやっています。日本の企業もたくさん来ていますしベンチャーの企業も来ています。先ほどローカルという言葉があったんですが、西栗倉村はグローバルっていう次元に持っていこうということで、1つ次元を上げています。

従って、やはりその京丹後はこれから目指す世界観というのは、ローカルを超えたグローバル観を持って、要するにグローバルとローカルの合成語ではあるんですけど、そういうマインドが必要かなと思います。

○委員 外部から見ていて、率直に感想申し上げると、新経済戦略で何が一体変わるかということが見えづらいということです。それは受け手である産業界、そして市民のメリットって一体何ですか。何がわかるんですかというビフォーアフターがよくわからなかったということです。じゃあ何が必要かというのと、この委員会のアウトプットを産業界や市民が見て、誰もが納得して、自分の行動に置き換えられるような、ストーリーが足りないと思いました。

それで、これで何が変わるか、暮らしが変わる、人手不足が変わる、廃業が減る。

ローカルベンチャーが増えるということだと思うんです。所得が増える、もし増えなくても、産業としての付加価値が上がる。人が増えなくても、well beingや幸福度がこういうふうに上がります。結果、出生率が増えますとか、健康寿命が延びますといったような、ストーリーと数字で見せないとおそらく、市民や議会も納得しないんじゃないかと思いました。

ストーリー性というのはちょっとしたミニストーリーというんですか。地元

の老舗企業の社長の視点、移住した起業家の視点、あるいは子育て世代の視点、アクティブな高齢者の視点ということで、新経済戦略のビフォーアフターをミニストーリー風に書いてみてはどうかと思いました。

そして最後に、制度設計という視点ですね。こういったことは、個人で頑張ること、企業で頑張ること、市役所で頑張ることがありますけども、この他に国が頑張ることがあると思うんです。

石破政権で予算、地方創生が倍になるという中で、一体何を国に期待するんだろう。

国に頑張ってもらいたいということは、例えば、京丹後循環特区を作りますと、そのために、減税、補助規制緩和をこういった面でやってもらいたいんだっていうことを打ち出してはどうかということでございます。

○委員 最初にぜひ、織物頑張っていただきたいなと思っております。

私も着物をしっかりと着る人間でございまして、京都市内を闊歩しておりますが、着物に関わる業者さんも着物着てないんですね。ここが1つ大きな問題でもあるかなって思っています。呉服さんが着物を着ずに着物を売っているっていうのが実際なところですよ。実家も西陣の機屋でしたので、私の親世代の兄弟7人のうちの5人ぐらいは織っていましたが、今は誰も継いでいないというのが実態でございます。京都新聞を見るたびに白生地生産量が減っているなあとこののを、いつも見て気にしておりましたので、是非とも何らかの形で、ご支援していきたいなと思っております。

雇用の方とかですね人材の方が、これはもう全国的に東京を除いてすべてが人口減というか、流出をしているというのが実態だと思っております。

その中でぜひとも、あるパイの取り合いじゃなくて、都会に行って馴染んで、数年経った人達を呼び戻すような、Uターンの活動を、しっかりやっていけたらいいなというふうに思います。

私もバブルの頃3年半、東京で暮らし仕事をしておりましたけれども、結婚して出産するときに、東京では住めないなって思いました。

そういうこともありますし、ぜひ京丹後に魅力を感じた方を呼び込んでいくような、都会に打って出ていく、戦いを挑むようなアクションをしてもいいのかなというふうに思っています。

あと既存の企業様の雇用の定着とか、離職防止については、やりがいとか、自分と他人のためになるやりがいであるとか、あと評価ですね、仕事をしたことに対しての評価をされること、これらもやりがいに繋がると思っております。

あとは、ある程度のリターン、これがないとやはり面白くない。あとは働きやすさって先ほどもおっしゃっていましたが、福利厚生充実、こういったものが、地方ででもやっぱり必要になってくるんじゃないかと思っております。

あとはですね企業の、もしくは商店の売り上げアップのためには、やはり地域

のみならず、海外に売り出していくということを、行政とともにやっていく。ジェトロさんとともにやっていくといったところが必要なんじゃないかなと思っております。

ピンで動くより団体で動いた方が圧倒的に効率が良いと思っております。あと、あるものを活かすということも、すごく大事だなと思います。海があり山があり畑も田んぼもある。

いろんなものはたくさんあるけれども、その魅力の発信が少ないということで、やはりこの情報発信力ですね。そこに力入れていけたらいいと思います。またマーケティングに強い方との連携も必要かなと思っております。

○委員 今いただいている内容を見ると、京丹後市ならではの、他にはできない項目っていうのがあんまりないんですね。他の自治体でも取り組んでいることが大部分だというふうに感じられるので、そこをもう 1 つ何かこう、工夫していただけないかなと思います。

私、京丹後市の魅力として 1 つ強く思うことがあって、他の地域から行くときに、めちゃくちゃ時間がかかるんですよ。

多分、東京からだとも 6 時間ぐらいかかるんじゃないかなと見ているんですけど。台湾とか香港よりも遠いです。

そういった点を何かこう、逆手にとって、何かこう魅力ある訴え方をできないかなと思っています。

○委員 NPOさん等にも言えるんですけど、丹後ってやっぱり小さな活動が多くて、なので、1 つ 1 つはすごくいい活動をされていても、その発信のボリュームがすごく小さいので、市として目指すものみたいな大きなフラックがあれば、そのボリュームも大きくなるのかなあと思いながら聞かせていただきました。

私自身京丹後で子育てをしながら仕事をしてきた身として、機屋さんなんかも、自宅でできますよっていうこともあったんですけど、そういうことをもっと知っていただけたらいいのかなあと思ったり、今働いている京丹後市の事業所さんの中でも、フルタイムで働くのではなくて、おうちでできることはテレワークでさせてもらったりだとか、もうちょっと柔軟性のある働き方ができると嬉しいなっていうことと、あと、すごい小さいことなんですけど学童のルールがもうちょっと緩くなると思い切り働きやすくなるのかなあと思ったり。

あと、市内移住なんかの支援もあってもいいのかなあと思います。やっぱりちょっと過疎地域だと、学校だとか塾だとかそういう面で、ちょっとこの地域だと厳しいなっていうことがあって、全く別の地域に行くよりは、京丹後市の中で便利なところに移住するという方法も、支援があれば選択肢の中に入ってくるのかなと思っていますので、そういった支援もあればいいかなと思いました。

○オブザーバー この新しい経済戦略の方向性、理念ビジョンの関係、同じ行政機関としてどうまとめていくか非常に、言葉、方向性難しいというふうに思い

ますが、今回各委員の皆さんからご意見あったように、100年の森構想みたいに、わかりやすくしておく必要はあるし、具体的な数字のようなものも重要なのかなというふうに感じておりました。

新産業については、すでに委員の皆さんから発言あったように、宇宙産業への進出、仕掛けが始まっていますけども、こういうところは高校生、大学生などにも非常に魅力に感じて、地元ってすごくいいんだよねというふうに感じるころでありますので、この先、次の第2、第3の産業というところへの仕掛けというのを、この新経済の中にも考えて落とし込んでいく必要があるのかなと思いました。

それと、2つ目は女性活躍の視点です。ここは女性の方が働く上で、各事業所のフレックスな働き方という点がありましたけども、実はこれは、フレックスな事業所や会社でトライアルしていくところを支援していく重要性は、女性の方による人材不足を補う点と、一旦、会社を勇退された方でも、働きたいんですけども、介護・看護の関係で時間が欲しいという方の働く分野も開放できるという視点ができますので、ここは人材不足というところにも直結していくんじゃないかなというふうに感じております。

それから最後に、関係人口の関係です。移住定住される方々が増えていく中で、関係人口創出ということで京都府丹後広域振興局としても、若者のネットワークづくりみたいなものを仕掛けています。現在600名ぐらいの登録ですけども、横繋がりを重要に、うまく展開していくと、新しくこちらへ来られた方々も、どこの方々へ繋がっていけばいいのか、またこれまでから各分野で活躍されている方々も、新しい事業展開してくと横繋がりがって非常に重要になってきますので、この辺りを拡充、拡大していくことは非常に重要なかなというふうに感じておりました。

○委員 本日は戦略の議論ということで、方向性としての取りまとめは妥当かなと考えるんですが、一方、メリハリといいますか、京丹後市ならではのといいますか、若干、総花的な印象があるなと考えております。

人口が減少していく中で、ますます投入する資源も少なくなっていく中、やはりまずは、地域を支える中核産業である観光、織物などの再生が急務だと思っていまして、持っておられる技術とかサービスの強みを、再評価ですとか高付加価値化、そういったものに取り組んでいくことがまず大事だと考えております。

そのためには外部との連携が不可欠だと思うんですけども、その点今回は高速道路が延びるというのは、外部企業にとっても非常に興味の沸くお話かなと考えておまして、先ほど遠いという話もありましたけれども、京丹後というエリアに企業としても関心が湧く良いきっかけになると思いますので、そのタイミングでしっかり情報発信して、外部企業に興味を持たせていくということがまず大事なかなと考えているところでございます。

○オブザーバー 地域にあるものを生かすというふうなご意見ございましたが、まさに私もその通りだと思っております、丹後にはいろいろないいものがあるんですよね。それを発信して生かしていくというのは非常に大事なことだと思っております、例えば食品関係の産業です。丹後は従来から織物とか機械金属業が盛んですが、食品産業の非常にポテンシャルが高い地域であるというふうに思っております。京丹後市は美食都市アワードを受賞されたという動きもありますし、私ども織物機械金属振興センターも食品の方の技術的な相談も非常に増えておりまして、名前から想像できないんですけど食品への支援も十分対応できる設備とか体制が整っていますので、食品への技術支援の強化をこれからやっていきたいなと考えておりますし、あるものを活かすというふうなことで非常に重要なポイントだなと考えております。

○会長 いろんなご意見いただきまして市の事務局の方でまた取りまとめをいただいて、次の会議進めていければというふうに思っております。それでは以上で予定をしておりました議事につきましては、終了しました。

(以上をもって閉会)